

インフィニット・マク ロスF

日本人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何番煎じかわからないISとマクロスのクロスオーバー。続くかはわからない。

追記：感想欄で指摘された部分を修正。

2018／05／19

目次

終結後、夏は舞い戻る	1
帰還後の夏は兎と出会う	12
夏が行くは戦乙女の園	25
夏と姉妹の出会い	41
蒼雫との決闘	59

終結後、夏は舞い戻る

『——さん!!—夏さん!?聞こえますか!?!』

「??ああ、聞こえてるよりリーナ」

アラート音が鳴り響くコクピット内で俺は目を覚ます。中は異常発生を表す赤い光に覆われている。最悪の目覚めだクソツタレ。

「??何で俺は寝てたんだ?」

『?—夏さんは大型バジユラと交戦中に被弾。同時にバジユラも撃破。その際の爆発で吹き飛び、現在はこちらから少し離れた小惑星に不時着しています』

「??そうか、わかった。それとリーナ。今は作戦行動中だ。俺の事はサマーと呼称しろ」

『??了解しました』

相変わらず作戦中に俺を名前で呼ぶ癖は直ってない様だ。

「それで??状況はどうなってる?」

『現在スカル4がアンタレス1と共にバジユラ・クイーンと交戦中。他の皆さんもバ

ジジュラ達と交戦しています』

「クオーターは？」

『幾つか兵装を喪失しましたが健在です』

「了解した。サマー。これより作戦に復帰する」

『ツ!? そんな無茶です!! もう貴方の機体はボロボロなんですよ!!』

「なあに、まだ機体は動く。充分戦えるさ」

『それでも——ブツッ』

クオーターからの通信を切る。悪いなりーナ。俺だつてさっさと帰投したい所なんだが——

「???このザマじゃあな」

下に目を向けると壊れたコクピット内の破片が深々と腹に突き刺さっているのが見える。コクピット内に浮いている血泡の量からして恐らく肝臓辺りがやられてるだろう。どう考えても致命傷だなこれは。

「せめて死ぬ前にカッコつけさせてくれよ!!!」

俺はもう殆ど動かない体に力を込め機体を動かす。そしてそのままスカル4——

—この世界での最高の親友の下へと飛ぶ。

「スカル4。聞こえるか？」

『ッ！一夏か!? お前大丈夫なのか!?!』

『?!残念ながら腹に穴開けちまったよ。多分、もう助からねえ』

『ッ!速くクォーターに戻れ!今ならまだ———』

『早乙女アルト!来るぞ!』

突如アンタレス1———紫のVF-27ルシファーから通信が入る。見ればバジユラ・クイーンが大量のミサイルを放っているのが見えた。

「チィ?!クソツタレめ!」

俺達はメサイアの機動にものを言わせそれを全て振り切り、ガンポッドで撃ち落とす。お返しとばかりにこちらもマイクロミサイルを放つが着弾寸前で見えない壁のような物に阻まれる。

「オイオイ?!何だよそりゃ」

『ちくしょう?!あれさえ無けりやいつでも撃てるのに?!』

アルトのメサイアには本来ある筈の無い特殊なガンポッド———以前の戦いで命を落とした戦友の形見でもあるスナイパーライフルが握られている。

『?!アルト。ヤツは何処だ?』

『?!グレイスか?奴ならクイーンの額部分だ。そこに巣食ってやがる』

言われた場所を拡大して見てみる。

——確かにそこにヤツはいた。一連の戦いの元凶であるクソアマ——グレイス・オコナーが。ヤツは醜悪な姿でこちらをニヤニヤと見ている。酷く不快だ。それにしても???

「なあアルト」

「?どうした?」

「あのバリアが無けりやヤツを撃てるんだな?」

「??ああ」

「何か策でもあるのか?」

「ああ、ある」

「ツ！本当か!?!」

勿論だとも。あるぜとっておきが。

「ヤツのバリアにMDEを叩き込む」

「MDEを??」

「ああ。どんなにバリアが強固だろうとあれなら削れる」

MDE——マイクロ・ディメンション・イーターと呼ばれるそれは着弾と同時に擬似ブラックホールを生み出すというトンデモ兵器である。これを正面から防ぐ手立ては未だどの世界にも存在しないだろう。

『だがそれ程のものを使っても着弾する前に迎撃されるのがオチだ』

アンタレスーが最大の懸念を口にする。それも当然だろう。だが俺がそれを考えていないと思っただか？

「安心しろ確実に当たるさ」

『確実に???何を言つて——まさか!!』

『お、おい!?どういうことだよ!』

『まさか貴様——直接当てる気か!』

「正解だ」

「これこそ第二次世界大戦中アメリカ兵を恐怖のドン底に叩き込んだ日本軍のイカレ野郎共が考えた最凶の戦法——神風特攻だ。」

『ッ!おい待てよ一夏!お前死ぬ気か!』

「さつき言つたろ?俺はもう助からねえよ。だつたらせめて死に方ぐらい選ばせてくれ」

『ふざけんなよつ!!お前??アイツは??リーナの事はどうすんだよ!』

『??さあな』

『やめろ!一夏!』

「お前が動くんじゃないやねえよバカアルト。お前はヤツを狙つてろ」

そして——大切な人がいた。

(ありがとな、皆)

バルキリーの鼻先がバリアに触れる。

(ゴメンな、リーナ。お前の気持ちに答えられなくて)

瞬間——MDEの爆発に俺は飲み込まれ、意識を失った。

——この日、この世界からイチカ・ワイルダーという人間は消滅した。

マクロス・クォーター内に嗚咽の音が響き渡る。泣いている少女——リーナ・
M・クロスローザ以外は皆、沈痛な面持ちで沈黙を保っていた。それは艦長のジェフ
リー・ワイルダーも同様である。

——戦いは彼らの勝利で終わった。クイーンは解放され、グレイス・オコナーの
企みは全て打ち砕いた。

だが——その代償は、あまりにも大きかった。

(この??馬鹿義息子が??!)

ジェフリーは思わず顔を覆う。歴戦の艦長の目尻には、小さく光る何かが見られた。

——イチカ・ワイルダー中尉 戦死。

彼は、この戦いにおける唯一の犠牲者だった。

20XX年 太平洋南部の島

「嘘???'」

私——篠ノ之束は驚愕した。私の足元に倒れている変わった服の血塗れの男。その顔に見覚えがあったからだ。

——数分前、私はこの島に突如生命反応が現れたとの報告を受けた。当然訝しげに思った。ここは太平洋の片隅にある絶海の孤島。半径数kmに侵入者があれば即座に

迎撃してしまえる程の防衛力を持つ要塞とも言える島だ（当然私が改造したのだけれど）。その反応はそんな防衛網に引つかかる事無く、突如島のど真ん中に現れた。怪しく思わない方がどうかしている。が、だからこそ私はその存在に興味が湧いた。

自慢では無いが今この世界に私以上の技術力を保有する国家は存在しない。そんな私が作った防衛網をすり抜けてきた。そして私は——彼を見つけた。

「???」
「???」

そう、それは3年前に死亡したはずの親友の弟——織斑一夏だった。

「?!?!」
「?!?!」

思わず彼に飛びつく。彼は答えない。当然だろう、意識が無いのだから。だけど私はそんな事どうでも良かった。彼が生きていてくれた——その事がただたまらなく嬉しかった。

「いっくん?! いっくん?!」

涙が溢れでる。それを拭う事もせずに私は彼に必死に抱きついていて。二度と失わぬ様に。

「う?!?! ぐお?!?!」

「?! いっくん?!」

彼が唸り声を上げる。そこで私はようやく彼が血塗れであることを再認識する。

「い、いっくんー!? 死なないでー!?」

彼を担いでラボへと戻る。

急いでラボ内に存在するナノマシン技術を応用した治癒カプセルに彼を裸にして入れてようやく一息つく。裸になった彼のとある部分に目を奪われていたのは内緒だ。それにしても?!

「なんなんだろこの服?」

見慣れぬゴムスキンの様な服。気になったので早速解析してみることにした。

「これ?? 宇宙服? 防弾防刃耐熱対冷?? 至れり尽くせりだね」

何でいっくんがこんなものを? 直接触って色々確かめっていると胸元のポケットに何かが入っているのに気付く。

「ペンダント??」

手に取ってみるとそれはペンダントだった。それも中に写真などを収めることの出来るロケットペンダントと呼ばれるタイプのものだった。

「ちよつとくらい?? いいよね?」

悪いとは思ったが好奇心を抑えきれなかった。いっくんの中で謝罪しながらそれを開けてみる。中には年嵩の男性といっくんと同じ年頃の少女がいっくんと共に写っている写真が収められていた。彼は、笑顔だった。それは、私が久しく見ることの

出来なかつたものだった。

(誰なんだろう??この人)

不思議に思うと同時に——彼を笑顔にさせている事に僅かな嫉妬を感じる。私に嫉妬する資格など無い。彼を傷付けた原因は他ならぬ自分なのだから。いけない、とその思いを頭を降つて振り払い、一応このペンダントも解析にかけてみる。瞬間——
—私はその解析結果を映した画面を信じられない思いで見つめていた。

「嘘??これ??I.S.?!?」

それは私が生み出した宇宙空間での活動を想定したマルチフォームスーツ——
I.S、正式名称インフイニット・ストラトスだった。しかし、

「こんな??こんな子知らない?!生み出してない?!生み出せる筈が無い!!」

画面に映し出されていたこのI.Sのスペックと兵装。それは現在世界中に存在するどのI.Sよりも高く、凶悪な代物。そして私はこんなものを造つた覚えは無いし、そもそも造り出せない。

「一体誰がこんなものを??」

いつくんが起きたら聞いてみよう。そう私は思うのだった。

帰還後の夏は兎と出会う

——夢を、見ていた。

それは三年前、忘れもしない、俺がドイツで誘拐され、あの世界へと迷い込んだ日。その日、俺はドイツで開催される第2回モンド・グロッゾに嘗ての弟である織斑冬二と共に姉の応援に行った時の事だった。

冬二は何でも出来る奴だった。幼い頃から神童だの天才ともてはやされ、更に決してそれをひけらかさずに常に努力を惜しまない、本物の天才だった。

対して俺は何もかもが出来なかった。いや、そう言うと言語弊がある。俺は世間一般から見れば充分に高い成績を誇っていたし、努力も惜しまなかった。が、それは側に本物の天才達がいた事によって否定された。織斑千冬と織斑冬二、この二人には何をやっても敵わない。唯一勝てたのは料理ぐらいというなんとも情けない有様だった。

そんな俺を世間は——世界は許さなかった。近所の間達は四六時中俺に対して侮蔑の言葉を吐きかけた。やれ、「どうして『織斑』なのに出来ないのか」だの、「お前の姉弟は出来るのに」だのと抜かしてきやがった。最初はそれを全て聞き流してきた

——が、当然俺にも限界はある。ブチ切れた挙句、今までやってきたあらゆる努力を全て止めた。習い事も、勉強も、全て。姉弟達は困惑していた。「あれほど頑張っていたのに何故」と。俺は「何となく」と答えた。俺としては頑張っていた姉弟達に心配をかけたくなかったからだ。そして否定され続け、努力すらも捨てた俺に待っていたのは——

——言い様のない世界からの否定だった。道を歩けば暴力を振るわれ、学校では全校一丸となつて俺を虐げる。当然最初は抵抗した。だが、それば一月、二月、半年、1年と続く内に俺は抵抗をやめていた。唯々流れに身を任せ、人形のように振舞っていた。

そんな生活が何年と続き——運命の日がやって来た。モンド・グロツゾ当日、俺は誘拐された。誘拐犯達の目的は織斑千冬のモンド・グロツゾ決勝戦の棄権だった。恐らく何処かの国が日本の一人勝ちを防ぎたいがためにこんな事をしたのだらうと子供ながらに、何処か夢見心地で考えていた。犯人の要求に対して日本政府の回答は——

——否だった。織斑千冬に確認を取ったがそのような事実は無い、と否定したのだ。その後、犯人達に織斑千冬が決勝戦に出ているのを見せられて、当然だろうと思つた。俺のような出来損ないの男と日本国の名誉、どちらを取るかなど女尊男卑に染まった日本政府のクソアマ共の事を考えれば言うまでもなかった。憤怒した犯人達に銃を向けられ射殺されそうになった時だった。突如俺の足元にピンク色の渦のようなものが出現したのだ。犯人達はそれに驚き、後ずさる。身体を縛られて動けなかった俺は、段々と広

がっていくピンクの螺旋に、為す術無く飲み込まれた。

気付いた時には、何処かの格納庫の様な場所にいた。そして、この場所こそが俺の恩人であり、大切な家族でもある義父ジェフリー・ワイルダーが艦長を務めるS・M・S所属の戦艦マクロス・クォーターの内部格納庫だったのだ。

俺を発見したのはS・M・Sスカル小隊リーダーのオズマ・リー大尉だった。そりやあまあ大層驚いていた。当然だろう、機体のチェックに来たら手足を縛られたガキが転がってたんだから。そのまま俺は彼に連れられ、当時から艦長を務めていたジェフリーこと義父の元に行った。まず名前や年齢、何故クォーターの内部に入り込んでいたのかを聞かれた俺は全て正直に答えた。俺の話聞いた義父とオズマ大尉は奇妙なものを見るような目を俺に向けてきた後、この世界の歴史を話してくれた。

今度は俺が驚く番だった。俺の世界には統合軍だのゼントラーデイなどといったものは存在しないし、当然バルキリーなんて機動兵器も存在しない。というかそもそも年代が違った。俺の世界が2025年だったのに対し、こちらの世界は2056年とかなりの差が存在した。何処かの安っぽい小説みたいだがここは異世界なのか？とか大真面目に考えるぐらい追い詰められていた。タイムスリップの線も考えたが聞けば2009年の時点でバルキリーは存在していらしい。

混乱する俺に対し、義父は「暫くクォーターに滞在すると良い」と言ってくれた上、「自分が面倒を見る」と当時のS・M・Sサマー小隊所属のガルシア・ブロンソン少佐という30半ばの男が名乗り出てきたくれたのだ。そして俺はガルシア預かりとなり、クォーター内部の居住空間に暫し滞在する事となった。

最初は、驚きの連続だった。見たことも無い設備に、聞いたことも無い文化、何もかもが俺の世界と違っていた。初めてゼントラーデイを見た時などは腰を抜かし、ガルシアに爆笑されたのはいい思いである。

その後、何もしないというのも何なので、ガルシアに頼み込んでクォーター内の食堂で働かせて貰っていた（料理長が「何でプロの俺の料理よりアマチュアのお前の料理の方が人気なんだよ」と軽く落ち込んでいたのは笑ってしまった）。それでも暇な時間というのは出来てしまうもので、その事をガルシアに相談したら「シユミレーターでもやってみるか？」と軍人用のバルキリーシユミレーターを空き時間に使わせて貰うことを許可してもらった。

それからというものは俺は、暇さえあればシユミレーターの中に缶詰になるようになった。おかげで一時期「シユミレーターの妖精」などというヘンテコな渾名を付けられてしまうくらい面白い詰めだった。そんな俺を、義父とガルシアはよく気にかけてくれた。時間があれば話しかけ、何か不備は無いかと心配してくれていた。俺は父や兄が

いればこんな感じなのかと、何処か、嬉しかった。

クオーターに乗り込んで半年、気がつけば——俺はクオーターの乗組員として皆に認められていた。各小隊の面子ともよく話すようになり、ガルシアは良き兄貴分として俺を助けてくれた。そして正式に義父の養子になり、イチカ・ワイルダーと名を変えた。オズマ大尉の影響で F I R E B O M B E R にガルシアと一緒にのめり込んだりもした。結局俺がこちらの世界に来た理由はわからなかった。フールド技術の専門家によれば時空間フールドがうんたらかんたら??? 要するに理解出来なかった。そうしてクオーターでの生活を満喫していたある日——突然義父から呼び出された。何事かと艦長室に行くと、何故かガルシアも一緒に義父といた。そして彼らの口から出た言葉に俺は驚愕した。

曰く、「可変戦闘機のパイロットにならないか」。早い話がスカウトだった。だが何故? 俺はクオーター内ではコックに過ぎない。当然軍人としての教育など受けた事はなかった。そう言う二人は呆れたような顔を見せ、俺に二つのデータを見せてきた。それはシミュレーターのスコア表で片方はそこそのスコアもう片方は俺が出した最高スコアで1つ目のスコアを大きく上回っていた。どう意味か分からず首を捻っている

と義父に告げられた。

「1つ目の方はガルシアのスコアだ」

??一瞬何を言われたか分からなかった。え?てことは何か?俺はプロの軍人を優に上回るスコアを叩き出したって事か?あまりのショックにポカンとしてしていると再度パイロットにならないかと問われた。

「もちろん強制はしない。我々はPMC(民間軍事会社)だ。当然作戦中に死亡することだってある。少なくとも私はお前の義父としてはお前がパイロットになる事は望んでいない。が、乗組員の命を預かる艦長としては腕の良いパイロットは1人でも確保しておきたい。どうするかはお前次第だイチカ」

泣いた。そりゃあもうビエンビエン泣いた。あまりの泣き具合に義父とガルシアがビビるくらい泣き叫んだ。恐怖や悲しみではなく、純粋な喜びで泣いた。義父に義息子と呼ばれ、更に俺の腕を頼りたいと暗に告げられた。何をしても出来損ないだった俺を、頼ってくれたのだ。

—— 悩む必要など、なかった。泣き止んだ俺はその場でS・M・Sのパイロットになる事を承諾。ガルシアが隊長を務めるサマー小隊に配属され、サマー4の呼称を与えられた。そうして俺は——

——
??ん。

声、聞こえる。

??つくんっ?。

どこか懐かしい、もう聞く筈のない声。

いっくんっ??!

嘗ての世界で、唯一俺を認めてくれた人。

いっくん??!

篠ノ之???

東!!

「いっくん「東さん!!!」とわあっ!!!」

「って??え?」

咄嗟に飛び起きた俺は目の前の存在を認識する。うさ耳にメルヘンな格好????間違いない、東さんだった。

何故ここに?そんな疑問が湧いてくるが今はそんな事はどうでもよかった。

「東さん??っ!!」

思わず飛び起き抱き着こうとして——ピシリと固まる。????妙に下半身がスー
スーする。身体を見回せば何故か傷一つ無い全裸姿。そう、全裸姿。更に起きたばかり
という事もあり、その、なんだ??俺のマクロスキャノンが発射用意完了済みというか???

「————キヤアアアアアアアッ
 「———— oh??」
 !!!!!???

これが、なんとも間抜けな再開劇。そしてこの世界に帰還してからの初めての他人との接触だった。

「??????????」

「どうぞ。お茶をお持ちしました」

「あ、ありがとうございます」

「??????」

あの後とりあえず服を着た俺は束さんと相對していた。正面には赤面した束さんがいる。俺は束さんの助手をやっているという少女、クロエ・クロニクルに入れてもらったお茶を飲みながらひたすら会話の糸口を探そうとする。

いやだつてどうするよ? 「俺の裸どうでした?」とか感想を求めるとか???ダメだこれ、完全に変態じゃねえか。「責任??とつてくださいね(赤面)?」とか???うおえっ!自分で考えといて何だけど吐き気が??。てか今更だけど赤面してる束さんマジで可愛い。結

婚してくれ。

アホみたいな事を考えているとクロエが溜息を着きながら、

「はあ???束様? いい加減にしてください。一夏様もお困りですよ?」

「で、でも???だって?」

めちやくちやか細い声で返答する束さん。かわいい。

「だってではありません。高々裸を見ただけで何をそんな乙女な反応をしているのですか」

「だ、だって束さん乙女だよ!?そりゃ男の子の裸を!そ、それも戦闘態勢のモノ見ちゃったらこうもなるよ!」

やめて束さん!俺のライフはもうゼロよ!恥ずかしすぎて死んじやう!!

「一夏様の【ピーー】をマジマジと観察していた人の台詞ではありませんね」

??? What?

「ちよ!?!くーちゃんそれは!?!」

「一夏様の【ピーー】を【バキーン】しながら【ユニコーン!】して挙句の果てに【俺の歌を聞けえ!!】で【往生せいやあああああ!!】してたじゃ無いですか」

「いやあああああ!!!くーちゃんやめてえええええ!!!」

???? オレハナニモキカナカッタ。イイネ?アツハイ。俺はわざとらしく咳払いをして

彼女たちの注意を自分に向ける。

「ゴホンツ???それで東さん?どうして俺がこんな所にいるんですか?」

「ハツ??えつと、少し長くなるけどいいかな?」

「はい、構いません」

「えつとね、じゃあまずは——」

そうして東さんは俺を見つけた時の事を話してくれた。突如謎の反応が出現したことで。それが傷付いた俺だった事。そして傷だらけの状態の俺を治療した事。

(???)随分と幸運だったな俺は)

これがもし太平洋のど真ん中だったりしてたら間違い無く鮫の餌になっていただろう。この時ほど神に感謝した時は無いだろう。

「——と、こんな所かな?理解出来た?」

「はい、ありがとうございます東さん」

東さんの説明は物凄くわかりやすい。流石天災といった所だろうか。クロエはこちらの邪魔にならない様に下がってくれていた。

「さて、説明も終わったところで???いつくん。これに見覚えは?」

そう言つてポケットから何かを取り出す東さん。

「俺のペンダント?」

それは俺が義父から貰った大切なペンダント。何故束さんが？

「結論から言うかね??これ、I Sなの」

「???はっ?」

「このデータを見てくれるかな?」

そう言つて束さんは手元の端末を操作する。すると壁に何かのデータ——恐らくこのI Sのものであろうデータが表示された。だがこれは——、

「俺のVF—25のデータじゃないか??」

そこに映し出されていたのは長らく戦場を共にしてきた愛機であるVF—25メサイア改の姿だった。

「やっぱり知ってるんだね?」

俺が困惑していると束さんがずっとよってくる。

「た、束さん?」

「とりあえず、洗いざらい吐いてもらおうよ?」

そうメチャクチャ黒い笑顔で告げられた。??古来より笑顔は攻撃的な表情であると言われているが、納得してしまうほど良い笑顔だった。

そうして俺は向こうの世界の事を話した。VFシリーズの事やS・M・S、イチカ・ワイルダーになった事も全て。最初、束さんは目を輝かせ、やがて眉間にシワがよつて

行き、最終的に頭を抱えてしまった。

「何だよ可変戦闘機って??何で2009年の時点でIS超えるもん造っちゃってんの？
フォールド技術って頭おかしいよ?。MDEとかイカレてる??」

向こうの技術は束さんをもつても頭おかしいレベルの様だ。やがて頭を抱えていた束さんはふうつと息を吐き、落ち着きながら言ってきた。

「とりあえずいっくんの事は秘密にしとくけどいいよね?いっくんも正直会いたくないでしょ?」

? 本当にありがたい。正直俺も向こうの世界で色々自覚してから織斑家には会いたくないと思っていたからだ。

「??ありがとうございます」

「気にしないでよ、いっくんの為なんだからね?さて、クーちゃん。いっくんを部屋に案内したげてよ」

「わかりました。いくつか空き部屋を見繕っておいたのでそこに案内致します。それでは一夏様」

「ああ、わかった」

そう言っ立ち上がりついて行こうとした所で束さんに呼び止められた。

「いっくん」

「? 東さん?」

「????」

東さんは無言で俺を抱き締めてくる。まるで二度と手放さいたいと言うように、しっかりと。

「た、東さん?」

「??おかえりなさい、いっくん」

——一言。唯一言。それが何よりも嬉しかった。

「??ただいま、東さん」

そのまま俺は東さんを抱き締める。そのまま俺達は暫し、抱き合っていた。

——なお、クロエに見つかってもものすんごくからかわれたのは余談。

夏が行くは戦乙女の園

「~~~~~」

『Let's go。突き抜けようぜ——』

あー、やっぱいいなあFIRE BOMBERは。オズマ少佐が進めた理由がよーくわかるぜ。

「——」

俺が今ヘッドホンで聞いているのは向こうの世界の超大物アーティストであるFIRE BOMBERの代表曲『突撃ラブハート』だ。

初めて聞かされた時は衝撃を受けたね。まさか異世界で某Bな人達に出会った当時の人達の気持ち分かるとは思わなかった。

「——ん——」

ん？なんでFIRE BOMBERの曲なんか聴いてるんだって？そんなもん——

「わ、ワイルダーくん！あの??？自己紹介を??？」

——現実逃避に決まってんだろ畜生。ヘッドホンを外すと聞こえてくる半泣

きの女性の声。

俺は辟易としながらクラスの9割以上が女のクラスを見回し、立ち上がる。正面には涙目の女性教師、更にその隣には3年前以来になる我が賢姉殿。一つ前の席には双子の賢弟殿。ああ本当——

「民間軍事会社S・M・S所属の戦闘機パイロットのイチカ・ワイルダード。仕事先でたまたまISを動かしてしまつてここに来た。趣味は料理と音楽鑑賞???まあよろしく頼む」

——なんでこうなつた？

切っ掛けは俺がこちらに戻つてきて数ヶ月後の事。俺はIS化した俺の愛機の性能を確かめるために束さんと共に彼女のラボに籠つていた。内容としてはシンプル、可変機構の確認や積まれている兵装の実験を行うものだった。で、機体の性能を見た束さんの一言が、

「えっ、なにこれこわい」

だった。束さん曰く、俺の機体の性能を例えるなら一年戦争時にウィングゼ〇カスタムをぶち込むようなものらしい。

しかもこれが量産機と知つた時の束さんはショックでしばらく現実に帰つて来れな

くなつた程だ。試しに束さんにこいつを量産出来るかと聞いたんだが??? 流石の天災でも劣化コピーが限界らしい。コピー出来る時点で充分オーバースペックなんだが。

クロエの事も聞いた。なんでもドイツの非合法な実験施設で生み出された遺伝子強化試験体らしく、両目はその際に移植された擬似ハイパーセンサー『越界の瞳』の影響で盲目になつてしまつたらしい。

最も、束さんに救出された後、生体同期型ISを移植されたお陰で短時間ならしかりと目の機能を有す事が出来るようだ。

??? 時たま俺の事を『御父様』などと呼んでくるのには困りものだが。

まあそんなこんなで戻つてきて数ヶ月後の1月、事件は起こつた。

—— 『世界初の男性IS操縦者登場』

世界を激震させる報道が文字通り駆け巡つた。動かしたのはブリュンヒルデこと織斑千冬の弟の織斑冬二。俺の双子の弟だった。束さんが姉貴に確認した所、何でも間違えてIS学園の受験会場に来てしまい、そこでISを触つたら動かせてしまつたらしい。

????? 相変わらず弟のうっかりは治つていないみたいだ。もう二代目遠〇凜を名乗つてもいいんじゃないかこれ？

男性にISは使えない。これは純然たる事実である。俺のバルキリーは厳密にはI

Sではないので当てはまらない。が、冬二は違う。純正のISを動かしたのだ。束さんはパニックになり——そして滅多に見ない真剣な表情で俺に依頼してきたのだ。

「IS学園に行つてふーくんの護衛をお願い出来ない？」と。

「????」
まあその時は「簡単な仕事だな」とか思つてたんだわ。束さんの頼みを断る理由もないし二つ返事で引き受けたよ。が、これはキツイ。周りを見れば女しかおらず、ミシエルの奴に連れられて良く遊んでた俺でもここまでの男女差は体験した事が無かつた。

自己紹介が終わり先生達が退室した後（姉はやや複雑そうな顔でこちらを見ていた）、教室には喧騒が戻ってくる。周りの女子達はこちらに話しかけるでもなくこちらを見ながらヒソヒソと話し合っている。手持ち無沙汰なのでもう一度音楽でも聞こうとしていた時だった。

「——少し、いいかい？」

賢弟こと織斑冬二が話しかけてきた。相変わらずの俺に良く似た顔立ち、そこに若干の自信のなさが混じっている。間違いなく、俺の弟だった男がそこに居た。

「???なんだ？」

淡白に聞き返す俺に若干顔を歪めながら冬二は言った。

「その、少し話したい事があるんだ???ダメかい?」

???流石に予想外だった。その内気づかれてコンタクトを取ってくるのは予想していた。まさか初日に来るとは思いもしなかったが。下手に断つても角が立つので了承する。

「ああ、いいぞ」

「つー本当かい?」

顔に出やすいなあコイツ。さつきとは打つて変わって一気に笑顔になる冬二。そんな俺達に話し掛けてくる奴がいた。

「すまない。その話、私もいいだろうか」

「???箒ちゃん?」

「???ちゃん付けを止める馬鹿者」

いや早いよお前ら。まさか東さんの妹で俺たちの幼なじみである篠ノ之箒まで接触してくるとか???意外と昔と変わってる箒なんだがなあ???

ちらりとこちらに視線を向けてくる冬二。俺は構わないと頷く。

「???じゃ話しにくいことだし、屋上にでも行こう」

そういう冬二に、俺達はついて行った。

「——で、お前らが聞きたいのは俺が織斑一夏かどうか、つてところか？」
「っ！」

屋上に着いた後、俺はいきなり確信を突く。この2人の反応を見る限り凶星なようだ。

「??? そうだよ。君は、兄さんなのか？」

「血族なのかと言われればその答えはYESだ」

そう答えた俺に奴らが向けたのは『安堵』だった。

「良かった??? 無事だったんだね」

「何だ、心配してたのか？」

「当たり前だ！お前がいなくなつたと姉さんから聞かされた時私がどれ程???」

少しおちやらけた風に言うのと半ギレで箒が叫ぶ。まあ自分で言うのもなんだがこいつは俺に惚れてた節があつたから当然といえば当然なのか？

「でも本当に良かった。これでまた3人で「悪いがそりや無理だ」——えっ?」
「生憎と今の俺の家族は親父達だけだ。もう織斑に戻るつもりは無いさ」

「な、何故だ一夏!?!お前はあれ程家族を大切にしていたじゃないか!!」

焦ったように声を上げる筈。冬二は絶句している。

その間に答えようとした所で次の授業の開始を知らせるチャイムがなる。

「おっと、悪いが今日はここまでだ。さっさと戻るぞ」

「ま、待て一夏!」

「生憎と織斑教諭の授業に遅れるなんて自殺行為は御免だぜ」

俺はその場に2人を残して教室に戻る。

旧家族との決別はこの世界に戻ってきた時に決めたことだった。俺の家族はこの世界にいない親父達だけだ。俺は織斑ではない、イチカ・ワイルダーなのだから。

——尚、間に合わなかった2人は織斑教諭による出席簿アタックで沈んでいた。

合掌。

「そう言えばクラス代表を決めなければな」

切っ掛けは、授業中に放たれた織斑教諭の一言だった。クラス代表とはまあ早い話が学級委員だ。が、IS学園のそれは通常とは違った大きな意味を持つ。学年ごとに行われるクラス代表戦含め、優先的にISに触れる機会を得られる他、クラスの看板的な意味合いを持つのだ。まあ、このクラスはイギリスの代表候補生であるセシ??何だったか

な。さつき冬二に絡んでたんだあの子。まあその子が選ばれると思っただが、

「私は織斑くんを推薦します!」

「あ、私も!」

「私はワイルダーくん!」

「私もワイルダーくんで!」

「わあお」

クラスの過半数が俺と冬二を推薦しやがったよ。前の席で冬二は「あの辞退し」推薦されたものに拒否権など無い」??はい」と辞退を拒否され轟沈していた。まあ理由も男子をマスコットとして使いたいみたいな理由だから拒否したくなるのもわかるが。

俺? 職業軍人がこんな子供の戦いに交じるのもなんだから拒否するつもりだ。俺が断ろうと声を上げたところで、

「——納得行きませんわっ!!」

バンツ!と大きな音を立てて机を叩きながら立ち上がる金髪縦ロールの少女。あ、さつき冬二に絡んでた???

「いくら何でも程度が低すぎやしませんこと! 私、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットは見世物を見る為にここに来たのではないのでしてよ!」

そうそうセシリア・オルコットだ、うん覚えた。てか言葉の端々に男に対する棘があ

るんだが??女尊男卑主義者か?ならめんどいけど潰しておくか?この先邪魔になりそうだし。

オルコットはそのままご高説(笑)を長々と語ってくれた。その内容がまあ日本を貶す貶す。クラス中の日本人達の顔がどんどん険しくなる。

「これだから嫌だったのですわ、こんな後進的な猿の国に来るなんて???'」

ブチン、と音が聞こえた気がする。多分箒だろう。今にも立ち上がって掴みかかりそうな雰囲気だ。流石に不味いと思ったのか織斑教諭が止めようと――

「???'イギリスだって食べ物に関しては後進的だろ(ボソ)」

冬二の小さな呟きがクラスに響き渡る。シン?と静まり返った教室内にオルコットの叫びが轟く。

「あ、貴方!我がイギリスを侮辱しますの!」

「先に日本を侮辱したのはそっちだろ。第一、ISを開発したのもISで頂点に立ったのも日本人だ。そんな日本人を猿なんて言ったんだ、あんたらイギリス人は猿以下なんだな」

「ぬわあんですってえ!!」

余計な事言つてんじゃないやねーよ冬二イ!明らかに拗れたぞオイ。ズケズケと正論で相手を論破するのはいいがもう少し言い方を考えろよ!そこからはもう罵詈雑言の嵐。

オルコットがキレて冬二が言い返す。先生方も介入するタイミングを失い、織斑教諭は額を抑え、自己紹介時涙目だった山田真耶先生はオロオロとしている。

「———そこまでにしとけお前ら」

仕方ないので俺が止める事にする。オルコットはこちらをキツと睨みつける。

「なんですの？まさか貴方も我がイギリスを」

「違うわアホ。そろそろ止めとけって言ってるんだよ。国際問題になるぞ？」

「何を言ってる———」

そこまで言ってるオルコットがハツとなる。やつと気づいたか。

「お前はイギリスの代表候補生なんだろう？今の言葉は下手したらイギリス政府の言葉として受け取られるぞ。そうなれば後は???.わかるな？」

真つ青になるオルコット。一歩間違えたら自分が第三次世界大戦の引き金なつていたかもしれないのだから当然なのだが。

「お前もだ織斑」

「え?!僕も?」

「当たり前だろうが。お前はブリュンヒルデの弟だぞ？お前の言葉をブリュンヒルデの言葉と曲解して受け止める馬鹿がいなわけじゃないんだ。その事を理解して言葉を使え。後、イギリスにも上手い料理はあるぞ？ハギスとか」

「??ハギス？」

「犬の糞みたいな見た目のイギリス番ソーセージ」

「決闘ですわっ!!」

俺のイギリス料理のレビューが気に食わないのか顔を真っ赤にして叫ぶオルコット。だつて事実なんだからしようがねえじゃん。

「———そこまでだ」

織斑教諭の一言で教室内が静まり返る。流石世界最強、と言ったところか。

「一週間後、アリーナの方でクラス代表決定戦を行う。これで満足かオルコット？」

「は、はい？」

「それと織斑。お前には政府より専用機が与えられる事になっている」

織斑教諭の言葉にクラス中がざわめく。

「専用機!？」

「1年のこの時期になんて？」

「いいな。私も専用機欲しいな」

「静かにしろ!?!?!?それで、ワイルダーの方だが」

「あ、俺は会社から貸し与えられてるのがあるので」

「??そうか」

一応、表向きは俺の素性と機体は、『モンド・グロツゾ後、篠ノ之束に保護され、彼女の知り合いの民間軍事会社の人間に預けられた元織斑一夏。機体は篠ノ之束のオーダーメイド品』という事になっている。この事を知っているのは学園の上層部や教師達のみで、一般クラスの人間には伝えられていない。目の前の織斑教諭も俺の事を知っている筈だ。

俺達に専用機がある事を知ったオルコットは尚余裕の表情だ。

「あら、専用機があるなら多少はマシそうですね」

「ふん、その高慢ちきな鼻をへし折ってやる?」

あ、冬ニキレてんな。口調が若干変わってら。

「まあこのセシリア・オルコットは寛容ですよ? 貴方達が望むのならハンデ位は付けて差し上げて宜しくてよ?」

「??いるかそんなもん」

「あ、じゃ俺はいくつか兵装封印して相手してやるよ」

ピシリ、と空気が固まる。あ、やべ。イラついて無意識に言っちゃまった——!

「ほ、ほう? 私を相手に随分と余裕ですわねえ??」

額に青筋を浮かべ、声を震わせながらこちらを見るオルコット。いや、だつてなあ?

「素人相手に職業軍人が本気だす訳にも行かないだろ?」

「——無様に地に這いつくばらせて差し上げますわ」
あ、もしかしてやつちまった？

「ねえねえ、ワイリ〜」

授業後、隣ののほほんとした感じの女子が話しかけてきた（オルコットはさっさとどっかいってしまった）。というか？、

「そのワイリ〜って俺の事か？」

「うんそうだよ。ワイルダーだからかワイリ〜。あ、私は布仏本音だよ〜」

「世界征服でも企んでそうな渾名だな」

「そして最後には『許してくれっ!』って土下座するんだよね〜」

良くこのネタわかったなこの子???. 今どき知ってるやつなんているのか？

「なんでワイリ〜あんなこと言ったの？」

???. 恐らく昼間、俺がオルコットに言った台詞の事だろう。

?。あまりいい喻えじゃないんだがな？。

「少し、血なまぐさい話になるがいいか？」

「うん、いいよ〜」

「んじやあ布仏。お前、人を殺した事があるか？」

「?????
へ？」

ポカンとする布仏。当然だろう。こんな事を聞かれるなんて予想外な筈だ。

「な、ないけど??？」

「そうか。俺はあるぞ」

目の前の布仏含め、周囲の聞き耳を立てていた少女達が皆顔を顰める。怪訝そうに布仏が、問いかける。

「なんでそんな事言うの??？」

「ん、まあ単純に本物の戦場をあいっは知らないんだよ」

「本物の????」

「ああ。殺し、殺される戦場の空気。それをあいっは知らない。

はつきり言って生ぬるいんだよ。少なくとも、戦う以上俺はあいっを殺す気でやるつもりだ」

「殺すって???でもISには絶対防御が」

絶対防御————ISに積まれている操縦者保護システムの一つ。これが女尊男卑主義者の勘違いを加速させている一因でもある。

「あるからって少なくとも絶対じゃない。世の女尊男卑主義者共はISが、と言うより

絶対防御があるから男には自分達は傷つけられないと思ってるみたいだがな??」

そこで一旦言葉を区切る。これは布仏だけじゃない。クラス中に向けた言葉だ。

「いいか、I Sは兵器だ。少なくとも俺はそう思っている。そして兵器である以上これは人を殺せるんだ。その事を理解しておけ」

「じゃあ??? 兵装の制限って???」

「下手をすれば絶対防御をぶち抜いちまうかもしれないからな。その為の制限さ。あとはそうだな??? まあ男を舐め腐ってるあいつを教育してやるだけさ」

??? 話終わった後の教室には陰気な空気が漂っている。恐らく考えた事も無かったのだろう。布仏はその様子が顕著だ。顔を背けて今にも泣き出しそうだ。

「??? 悪かったな辛気臭い話して。ほら、これでも聴いて元気出せよ」

愛用のヘッドホンを布仏にかけさせ、『突撃ラブハート』を聞かせる。次の瞬間、布仏はカット!と目を見開き、続いてこちらにぐりんつと顔を向ける。

「ワイリー」

「なんだ?」

「最高」

「同士よ」

ガシツと握手を交わす俺と布仏。なんか知らんけど F I R E B O M B E R 信者が

1人増えた。やったぜ。

で、だ。放課後、山田先生に寮の部屋の鍵を渡されて部屋に行った。そこまではいいんだ。

「おかえりなさい！ご飯にする？お風呂にする？それとも??わ・た・し?」

部屋に裸エプロンの女が居た。俺は無言で扉を閉める。部屋の番号の渡された鍵の番号を確認する。間違いなく同じだった。???嫌なんだがここで突っ立ってても始まらないのでドアを開ける。

「おかえりなさい！私にする？私にする？それともわ・た・し?」

「fuckin', shit!!!」

見間違いでも夢でもなかった。思わず全力で罵り声を上げた俺は悪くないと思う。マジで呪われてんのかな俺。

今度どっかでお祓いしてもらおう。そう思いながら目の前の痴女の対応に困る俺だった。

夏と姉妹の出会い

——早朝、IS学園の自室で楯無は目を覚ます。最早癖になってしまっているせいで寝る時は全裸な彼女。部屋に誰も居ないという安心感があつてかその魅力的な裸体を惜しげも無く晒している。スラリとした肢体。形の良い乳房。街を歩けば10人が10人『美しい』と答えるほどの美少女の姿が、そこにはあつた。

最も、彼女は1人ではないのだが。

「ん???ふわあ??」

可愛らしい欠伸をして寝ぼけ眼を擦る楯無。そして何気なく隣を見る。

——彼女と同じ様に全裸の少年が、そこには居た。

「????????
??????」
「んん??」

違和感を感じたのか少年がゆっくりと身体を起こし、未だ覚醒していない意識を目覚めさせるために頭を振る。そして漸く意識がハッキリとしたようで、楯無を見る。

「ふえっ??」

見られている——その事を意識した途端に楯無は羞恥に身を縮こまらせる。顔は真っ赤で、彼の方をまともに見れない。そんな楯無に気を良くしたのか、少年がゆっくりと近づいてくる。そつと手を彼女の頬に添え、その額に唇を落とす。

「あっ??」

「昨日は可愛かったぜ、刀奈」

彼に自身の「本当の名前」を耳元で囁かれたその瞬間、彼女の脳内に昨夜の記憶が閃光の如く駆け巡る。

「っ!~~~~~っ!!」

その事で限界を迎えた楯無は、あまりの羞恥に気を失ってしまうのだった。

「信じられない?!?! 本当信じられない?!?!」

「だから悪かったって言ってるだろ?!?! いい加減機嫌直せよ刀奈」

「今の私は楯無よ! 本名で呼ばないで!」

「ハイハイ、わかったよ刀奈」

「だから?!?! つ、ああもう!」

やあ諸君おはよう。俺だ。イチカ・ワイルダーだ。さて、取り敢えずは今の状況について説明しようと思う。俺の目の前でプンスカと腹を立てているこいつは更識楯無という。此処、IS学園の生徒会長でロシア代表、名目上は俺の護衛という事で同室になった奴だ。

——そして昨日、俺を裸エプロン（下には水着を着ていた）で出迎えやがった例の痴女だ。

「ちよつと!?! 誰が痴女よ!」

お前だよ。つーか聞こえてたのかよ。

話を戻そう。俺は突如女子高にぶち込まれ、代表候補生（笑）に喧嘩を売られ、ガラにもない事を偉そうに語ったお陰で疲労困憊な挙句イライラしていた。漸く部屋で一息つけると思ったら部屋に痴女がいたんだぜ？そりゃキレもするさ。

更に俺はこちらの世界に帰ってきて数ヶ月間禁欲生活を送っていたんだよ。

考えて見ろよ？まさか東さんやクロエが近くにいる環境でそんな事をする訳にもいかず、なんやかんやでイライラが天元突破してしまった俺は晩飯も食わない代わりに目の前の少女をペロリと喰っちまった訳だ。だってしようがねえじゃん？据え膳食わぬは男の恥じゃん？いい加減限界だったんだ。誰も俺を責めないでくれ。

「人の初めて無理矢理奪っておいてその言い草はないでしょ??」

おっとまた聞こえていたらしい。でもなあ??

「途中から俺に跨って思いつきり腰振りながら喘いでたのはどこの誰だったかな?」

「っ!?それは、その??」

顔を赤くして俯いてしまう刀奈。やっべかわい。そして揶揄うのめっちゃ楽しい。

まあ最初はいいつもイヤイヤだったみたいんだけどな?途中からおつかなびつくりな感じで俺の「マクロスキャノン!!」を触ってきたと思っただらそこからはもうノリノリだったよ。こいつの本名の刀奈つてのも行為中にこいつがそう呼んでくれて言ったからだし。

あ、言い忘れてたけどこいつの実家は所謂暗部と言う奴らしく、俺の護衛も家業の一環らしい。楯無は代々その当主に受け継がれる名前なんだとか。

「さて、取り敢えずシャワーでも浴びるか」

「???先にいいかしら?」

「何だつたら一緒でもいいぞ」

「馬鹿じゃないの?」

おっふ?冷たいなあオイ。まあ足腰ガクガクでまともに立てないみたいだから俺が連れてくしか無いんだが。

——当然、風呂場でも美味しく頂いた。なんだかんだであいつも楽しんでたみたいだしセーフだろう。

『いつくん?流石に我慢しろとは言わないけどさあ???いくら何でも手を出すのが早過ぎない?』

「東さん覗いてたのかよ???」

『人聞きの悪いこと言わないでよ!』

放課後、冬二と箒の追求をのらりくらりと躲し、賢姉殿の困惑した視線を受け、オルコットからの殺意を持った視線を知らんぷりでスルーし、布仏と共にクラス内にFIRE BOMBERを布教したりとしている内に気づけばこんな時間になっていた。

部屋に戻っても特にやる事も無いので、一応盗聴器等の確認をしてから定期連絡として東さんに連絡を取る。その時の第一声がこれだ。

『まあいっくんも男の子だし? そういう欲求があるのはわかるよ? でもさ、会ったばかりの子にいきなり手を出すのは???ねえ?』

『???こっちに帰ってきてから色々溜まってたもんで』
『???どうせだったら私にやればいいのに(ボソツ…)』

「ん?なんか言いましたか?」

『な、なんでもないよ!』

焦った様に声を上げる東さん。俺は頭に『?』を浮かべながら前々から頼んでいた事を聞く。

「それでどうですか?以前頼んでた事は?」

『うん、大体調べはついてるよ。いっくんを攫った連中と機体のIS化についての事だったよね?』

「はい」

「1つ目の事はまあ、俺個人で気になっていた事だ。今更連中をどうしようなんて思っていないが知らないのもモヤモヤするので知っておきたかった。」

問題は2つ目だ。機体は何らかの理由によってIS化した事だ。これに関しては理由がつかないのだ。束さんが改造したわけでもあるまいし???もし何らかの異常によりこうなったのであれば破壊する事も視野に入れねばならない。理由がわかるとは思えないが一応この事も束さんに調査を依頼したのだ。

『それじゃあ1つ目だけど??こいつらの名前は亡国機業。フアントムタスク第二次世界大戦以降に生まれたテロリスト共だよ』

「そりやまた、随分と御長寿なこったな」

『元々は時の権力者達によって創設された治安維持部隊で、言わば裏の国連つて所かな?。今は上層部の連中が暴走してただのテロリストと変わりないらしいけど。因みに、いっくんを攫わせたのもその上層部の連中の命令らしいよ』

「随分と詳しいみたいだけど知り合いですか?」

『組織の方針に疑問を持ったらしい一部の幹部が束さんに接触してきてね。そこからの情報だよ』

「信用出来るのか?」

『裏取りは出来てるから大丈夫だと思おうよ』

「そうか??」

正直複雑な心境だが???俺を親父達に会わせてくれたことだけは感謝してやってもいいかもしれない。もし会ったら脳天に鉛玉をプレゼントしてやるがな。

『それで2つ目の方なんだけど???大分仮説まみれになってるけど良い?』

「まあそう簡単にわかるとは思ってませんよ」

『シンプルに言えばこの世界に最適化されたんだよ』

「最適化?」

『いつくんの機体はこの世界にすれば完全な異物な訳でしょ?排除しようにも向こうからすればどうしようも出来ない???ならこの世界にあるものに適合させてしまえばいい、って事でIS化したんだと思う』

「束さん???

そんな型月設定とSFが混じった様なこと堂々と行って恥ずかしくないんですか？

『うん。東さんも言ってると思った』

「またガチャで爆死でもしたんですか？」

『はい。東様はF〇〇に10万程課金して見事な爆死を遂げました』

『くーちゃん!?!』

あ、やっぱしてたんだ。てかそこまで把握してんのかよクロエ。

『イチカ様からも言ってください。未練がましく未だにジャ○ク狙いで回し続けてるんですよ』

『だってジャ○クちゃん可愛いもん！可愛いは正義だもん！』

「もう廃課金者じゃないですか???’」

『イチカ様も自重してください。そんなに性欲を満たしたいなら東様に手を出してください。このままでは東様が万年発情ド変態兔に霊基再臨してしまいます』

『くーちゃん!?!それ罵倒以外の何者でもないからね?!』

相変わらずのキレッキレの毒舌だ。ホントブレねえなあクロエ。

???'なんで東さんに手エ出さなかったのかって?恩人相手に汚え欲望ぶつけられる程開き直れねえよ。

『いっくん???'』

「まあ耐えきれずにやっちゃったんですけどね（笑）」

『台無しだよ??』

『イチカ様は下半身に正直すぎです』

「うん、そろそろ止めよう？流石に心に刺さるから」

俺だってデリケートな心を持つ15歳なんだぜ？同年代の少女に罵倒されて傷つかないわけじゃねえんだよ？

『ハア???全くもう。あ、それといっくんの機体でいくつか封印した方がいい武装リストアップしといたから送つとくよ』

「おお、そりや助かるな」

『それとスーパーパーパックとアーマードパックの改良にはもう少し時間が掛かりそうだから例のイギリス女との戦いはすっぴんになるけど良い?』

「モーマンタイだ。むしろ素手縛りでも良いくらいだぜ」

『ふふつ、凄い自信だね?それじゃあまたねいっくん。頑張つて』

『イチカ様、失礼します』

「ああ、二人ともまたな」

通信が途切れ、部屋は静寂に包まれる。時計を見れば夕食までにまだ時間があつた。『??:整備室で機体の確認でもしとくか』

そう思い立った俺は部屋を出て、ISを整備するための整備室に向かうのだった。

「お邪魔しまーす、と」

IS学園整備室。練習機の打鉄やラフアール・リヴアイヴが整備の為に搬入される場所であり、代表候補生達が自分の機体の整備をする為に利用する場所でもある。女子校らしくない無骨な雰囲気のもとに俺は来ていた。

「取り敢えずはバルキリーを出してっつと」

俺は空いていた格納ドックに量子変換していたバルキリーを出現させる。そして早速機体の確認と束さんに言われた武装にロックでもかけようと思ったのだが、

「——誰だ」

こちらを見ている視線に気づき、思わず殺気を向ける。数瞬、沈黙が場を支配する。やがて、青い顔をした、どこか見覚えのある少女が顔を出した。

「??刀奈?」

反射的にそう言ってしまうがすぐに違うことに気づいた。

なんというか、刀奈と違ってこいつはどこか自信なさげなのだ。

後胸が小さい。昨晚散々愛でたモンを見間違える程毫碌しちやいないつもりだ。

「??今、物凄く失礼な事考えなかつた?」

「気のせいだろ」

エスパーかよこいつ???

「貴方がわかりやすいだけだと思う」

「そんなにわかりやすいのかよ俺??」

これでもポーカーフフェイスが得意なつもりだったんだがなあ??。

「で、お前は?まさか俺の機体のデータを盗みに来たのか?」

「?違う。私は更識簪。日本の代表候補生」

「日本の代表候補生ねえ?。ん?更識って事は??」

「??ここの生徒会長の更識楯無の妹」

「ああ、そういや妹がいるとか言ってたな」

ベッドの上でだが。完全に蕩けきつてたからこそこの質問にポンポン答えてくれたからな。その時に家族構成を聞いたのだが妹がいると言っていた。おそらく彼女がそうなのだろう。

「んじや、俺も自己紹介だ。俺は——」

「——イチカ・ワイルダー。旧名織斑一夏。13歳の時にモンド・グロツソで誘拐されその後行方不明になる。3年後、織斑冬二発見の際に篠ノ之東博士の手により保護されていたことが判明。第2の男性IS操縦者として注目を浴びる。尚、本人は民間軍事会社S・M・S所属の戦闘機パイロットと言っているがそのような会社の存在は確認されておらず、篠ノ之東博士が造ったペーパーカンパニーの可能性が大」

「??へえ、随分と良く調べてるじゃねえか」

「?この程度の情報は調べればすぐ出てくる」

それでも代表候補生ごときに集められる情報量じゃない。刀奈の妹とだけあってそっちの道に通じてるらしい。

「貴方は?」

「俺?」

「貴方はどうやってあの女の本名を聞き出したの?」

「そういうやあいつ表向きは『楯無』だったな。てかあの女って。仲悪いのかこいつら?」

「いやなに、ベッドの上でな」

「???」

「おーおー顔真っ赤にしちやって。こういうところは姉妹なんだな。仲悪いみたいだけど。」

「で？何のようだったんだ？」

「??男性操縦者の専用機に興味があった。唯、それだけ」

「んじやあ見るか？」

「え??、いいの？」

「別に詳細なスペックデータを見せるわけじゃないからな。機体ぐらいは見せてやる
さ」

やましい事なんざないからな。別に機体の見た目や多少の武装を見られたところで痛くも痒くもない。簪は俺に連れられて俺の機体の元へ行く。その表情は鉄仮面のよう
な無表情だった。

「こいつが俺の相棒のVF-FEX25メサイアエボルヴだ」

フルスキン?
「全身装甲??珍しい??」

「装備は??まああまり言えないが取り敢えずはビームガンポッドと頭部のビーム機銃。
あとはマルチロックオン式のミサイルランチャーってところ「待つて」ん?どした?」

「どした?じゃない。この機体はビーム兵器を積んでるの?」

「おう」

「??イギリスがレーザー兵器を開発したばかりなのに??」

「一応、篠ノ之束謹製のものだからな」

「マルチロックオンシステムも？」

「もち。そういやお前の機体は？代表候補生つくくらいなんだ。専用機ぐらいあるんだろ？」

「??ZMT—S29」

「ザン〇ツクかよ」

「こいつ大気圏上部からどこの都市を狙うつもりだよ。」

「冗談？。正式名称は『打鉄式式』。マルチロックオンシステムを搭載した唯一の機体??だった」

「そりゃ災難なことだな。俺が出てきたせいで機体のアドバンテージを潰されちゃった訳か。」

「なんか、悪いな」

「別に良い。それに完成すらしていないから」

「?????。
は?」

「どういう事だ？」

「開発元の倉持技研が男性操縦者の専用機開発の為にこの子の開発を投げ出したの??。そのまま凍結される前に私が引き取って作ってる」

「システムから何かから何まで？」

コクリと頷く簪。???んな無茶苦茶な。仮にも国家を背負うかもしれない代表候補生の専用機開発を投げ出すとかアホなのか？

「いや、アホなんだろうな」

思わず思っていた事が口に出る。

もし仮に簪が国家代表までのし上がった場合間違はなく倉持技研は大打撃を受けるだろう。国中からの叩き上げに合い、衰退の一步をたどるのが目に見えている。

???目先の欲望に囚われた結果がこれだよ。つくづく馬鹿にはなりたくないもんだ。

(???一時の欲望に流されて刀奈に手エ出した俺が言えた義理じゃねーな)

「??何が？」

おっと、聞こえていたらしい。

「いや、なんでもない」

さて、どうするかね？放っておいてもいいんだが彼女の専用機が完成していないのは冬二あいつが原因だ。元身内としては放置しておくのは夢見が悪い。

「なあ、具体的には何が完成してないんだ？」

「???機体出力の調整とマルチロックオンのプログラムが、まだ」

「よし、マルチロックオンのプログラムに関してはこっちで提供しよう。機体出力に関

してはウチの会社のアドバイザーを紹介してやるよ」

「??? いいの?」

驚いたように目を見開く簪。この事は俺に関してメリットが何にもないからそれを不思議に思っているのだろう。

「ここで知り合ったのも何かの縁だ。多少は協力してやるさ。それに——」

「それに?」

「困ってる女の子がいたら助けるのが礼儀だってダチに教わったからな」

「??? ふふっ。何それ?」

クスリと笑う簪。先程の鉄仮面よりも余程いい顔だった。それにしても、なんだ。

「笑った方が可愛いぜ、簪」

「??もしかして、口説いてる?」

「さあ? どうだろうな?」

「??本当、変なの」

「よく言われるよ」

そのまま、俺達はしばらくの間談笑するのだった。

——さて、アドバイザー役として束さんを説得せねば。
あのコミュニケーション加減何とかしねえとな
????。

蒼雫との決闘

オルコットと決闘することが決まって1週間経った。この1週間正直暇で暇で？。

刀奈を弄る（意味深）くらいしかやる事が無かったぜ☆。

が、それも今日で終わりだ。

現在俺はIS学園のアリーナのピットに先生方や冬二達と待機している。アリーナ内を見れば既にオルコットは蒼い機体——第三代IS『ブルー・ティアーズ』を身にまとって待機していた。その右手には大型のスナイパーライフルが握られている。武装から見てもシエルと同じタイプらしい。色も同じだし。

ちなみに今日の試合は総当たり戦となっていて、オルコットVS冬二、オルコットVS俺、冬二VS俺の順番になっている。本来なら冬二がとつくにアリーナに出ていなければならぬ時間帯なのだが??、

「冬二。お前ISは？」

「???まだ届いてない」

「マジかよ???!」

現在時刻は試合開始5分前。本来ならとつくに届いているはずの時間帯だ。それが

まだ来てないとか???どんだけ時間にルーズなんだよ倉持技研。

「で、なんで箒がここに?」

そう、何故か関係者以外立ち入り禁止のピットにこいつがいるのだ。

「わ、私は幼馴染なのだから十分に関係者だろう!」

「???そうでつか」

「???だいぶ無茶苦茶な理論だがスルーする。いやまあこいつはいいんだよ?問題は?、」

「???」

「ね、ねえ箒ちゃん?なんで貴女がここにいるのかお姉ちゃん教えて欲しいなーって」

「貴女と話すことなんて無い」

「そ、そんな事言わずに?」

俺の護衛で着いてきたかた??楯無と俺の応援に来てくれたらしい箒がかち合ってしまったのだ。わかっていた事だがものすんごく仲が悪い。というか箒が楯無を一方的に嫌ってる感じだ。

あまりの空気の悪さに先生方や冬二達も何か言いたそうにしているくらいだ。ぶつちやけ俺も話しかけるの躊躇われるんだが???

「あー箒?そーいや専用機の方はどうなった?ウチのアドバイザーに言っただが」

「あ、うん。おかげで武装面はほぼ完成。『山嵐』も出来てるし後は出力系統の調整だけ」
「ほお、そりやすごいな。完成間近か」

一応正体は隠してるけど何とか普通に接せたみたいだ。コミュ障東は伊達じゃないからな。パニック起こさないか心配だったんだよ。

「うん。イチカが紹介してくれたおかげ???ありがとう」

「気にすんな」

「ねえ???」

簪と話しているとあら不思議。反対側から不機嫌そうな声が聞こえてくるじゃありませんか。顔を向ければこちらを睨みつけている楯無さんが。

「な、なんだ?」

妙な威圧感を感じ思わず後ずさる。楯無は対照的にグイツと近づいてきた。

「いつからそんなに簪ちゃんと仲良くなったの?」

「い、いや???ちよつと専用機の関係でだな?」

「ふーん???。まさかとは思うけど???」

ガシツと方を掴まれる。つて!?

「あだだだだだだだだだだ!!肩!肩に食いこんでるつて!?!」

「手え出したら???切り落とすから」

「何を!？」

なんでハイライト消えてんだよ!?! てか切り落とすって何!?! ナニを切り落とすんですか!?

「??? 止めて」

「つて、お?」

「ツ!?! か、簪ちゃん!?!」

今度は後ろに引つ張つられる。どうやら引つ張つたのは簪のようで??? つて、

「あのく簪さん? どうして腕を俺の腕に絡めてるんでしょうかね?」

「??? なんとなく?」

「なぜに疑問形??」

「ち、ちよつと貴方! 簪ちゃんから離れなさい!!」

「いや離れようにもガツチリホールドされてんですが」

「ツ! 切り落とすツ!!」

「なんでさつ!?!」

「??? お前達、その辺にしておけ」

織斑教諭からストップがかかった。危ねえ? 助かった??. あと箒、睨まないでくれ頼むから。もう俺キヤパ限界だから。

になれないからな。

「さて、ワイルダー。カタパルトへ移動しろ」

「了解」

俺はアリーナへと続くカタパルトに進み、発射台に脚部をセットする。同時にブースターを起動し発信体勢にはいる。

「発進準備完了。いつでも行けます」

「チエック完了、システムオールグリーン！ワイルダー君、発進してくださいー！」

「了解。イチカ・ワイルダー、VF-FEX25 メサイアエボルヴ、出撃する!!」

背中のブースターを吹かし俺はアリーナ内へと躍り出る。???狭いな。ファイター形態の時は注意が必要か。俺はそのままの勢いでオルコットがいる所まで上がっていく。

「あら、漸く来ましたのね。待ちくたびれましたわよ?」

「悪いな。冬二は専用機の調整が終わってないんだ。代わりに俺が先に相手してやるよ」

「??貴方ですか、イチカ・ワイルダー??」

どうやら全身装甲だったから中身が俺だと気づかなかったようだ。オルコットは苦々しげな表情でこちらに銃口を向ける。

『警告。ロックされています』

おいおい、気が早いな。まだ試合開始の合図は出てねえぞ？

「最終通告ですわ」

「あ？」

オルコツトが個別通信プライベートチャネルで話しかけてきた。

「貴方が、今ここで、その機体から降りて私に誠心誠意謝罪するならば許してあげなくてもなくてよ？」

「??はっ」

飛んだ脳内御花畑だ。戦いの前にんなこと言うか普通？俺は全域通信オーブンチャネルに切り替え、

『嫌だねバーリーカwwwwwwww』

ついでにオルコツトに中指を突き立ててやる。客席の女生徒達もポカンと間抜け面を晒して——訂正、本音の奴一人だけ大爆笑してやがる。俺の返答（笑）を受けたオルコツトは顔を真っ赤にしている。

「なら——前言通り無様に地面に這いつくばらせて差し上げますわ!!」

ビーツ！とブザーがなると同時に奴の銃口からレーザーが放たれる。それが、開戦の狼煙だった。

「おっと」

俺はレーザーを首を軽く捻る事で躲す。ふむ、狙いも甘いし構えもなっていない。ミ

シエルには程遠いな。

「なっ?! くっ、これならどうですの!?!」

オルコットが言うやいなやブルー・ティアーズからいくつかのパーツが分離し、浮遊する。今度はそれからレーザーが放たれた。

「つと、おいおいなんだよそりゃ? ファン〇ルかよ?」

「我がイギリスが誇る第三世代兵装、B T兵器『ブルー・ティアーズ』ですわ!!」

機体名と同じかよややこしい。それにしてもB T兵器か???. こりゃゴースト並だとするとキツイぞ???

「さあ踊りなさい! 私とティアーズが奏でる円舞曲で!!」

その言葉の直後、全方位から俺をレーザーが襲った。

・冬二視点

「??信じられない」

僕は目の前でイチカ——兄さんが繰り広げる光景に圧倒されていた。思わず驚嘆の声を上げてしまう。それはほかの人たちも同様で、箒やさつき兄さんと話していた2人はポカンとしている。山田先生と織斑先生も驚愕しているようだ。

「す、凄いですねワイルダーくん」

「ああ??とても信じられん」

試合開始から約30分。兄さんはオルコットの攻撃を1度もかすることすらなく、躲けている。

しかも、目算だが半径5m以内から動いてすらいない。

機体性能以前に、操縦者としての技量差が圧倒的すぎるために起きた光景だった。

僕はまるで踊る様にレーザーを躲す兄さんを見る。そこには、かつて落ちこぼれと蔑まれていた彼はいなかった。

「一夏??お前に何があったんだ??」

思わずと言ったふうに織斑先生——姉さんから零れ落ちた言葉は、まるで悲しんでいるかの様だったのが、心から離れない。

・セシリア視点

(どうして!?!どうして当たりませんか!?)

私——セシリア・オルコットは焦っていた。父の事もあり今まで蔑んできた男に
こうも、こうも——!

(一方的に遊ばれるなんて!?)

当たらない。そう、当たらないのです。彼は自身を中心とする半径約5 m以内で、
私の攻撃を躲し続けています。それこそまるで円舞曲ワルツを踊る様に、華麗な動きで。

(くうっ?!?!こうなったら?!?!っ!?)

「もういい。わかった」

気付けば彼は右腕の大型の銃でBTを1つ撃ち抜いていました。その目にも止まら
ぬ早業に私は動揺してしまいました。

「な、何故!?!どうやってティアーズを!?!」

「お前、BTでの攻撃と自分での攻撃を並行して出来ないだろ?」

「っ!?!」

そう、それは今の私が抱える最大の弱点。

BT兵器の並行運用が出来ないと言う部分を見抜かれた——!?!

「そして俺の死角からしか撃つてこない??。タネが分かれば後は簡単だ。常に死角を警戒してりやいい」

「そんな簡単に?!!?」

通常、人間は死角からの攻撃に弱い。ですが、その弱点を克服したプロクラスの人間は決して少なくないのですわ。

それはつまり、目の前の男が最低でも国家代表候補生クラスということを示していました。

「そんな???男なんかに??男なんかに!!?」

「男だからとこつちを見下し続けたのがお前の第1の敗因。そして——」

彼が言い切る前に彼の機体に異変が起きる。その姿を一言で表すならば——

「せ、戦闘機?！」

「——俺がプロだったのが第2の敗因だ」

——消失。

「え???は?」

次の瞬間には彼の姿は私の視界から消えていました。ハイパーセンサーにも反応はありません。

「な??に、がつ!!」

真上から飛来した弾丸に背中を撃ち抜かれる。咄嗟に目を向けるもそこには、ただ青空が広がっているだけでした。

「いったいどうなつ、て!？」

今度は左。が、何も無い。そこからは、もう思い出したくもありませんでしたわ。全方位から飛んでくる弾丸が私を撃ち抜き、気付けばティアーズも温存していたミサイルビットも破壊されていました。

「うっ?? つう?? はあ?? はあ??」

「まだやるか?」

思わず声の方向にバツと目を向ける。彼の機体は、戦闘機から脚が生えているという珍妙な姿をしておりその場でホバリングしていました。

「わた?? くしは、? まだ?!!」

「そうか、なら——」

再び人型になる機体。彼の機体の各部分が開きそこに小型のミサイルがぎっしり詰まっているのが見える。頭部の二本の角の様な部位もこちらを向き、彼自身銃口をこちらに向けていた。

「——手向けだ。全弾持つてけ」

一斉射撃。そこからの記憶は私には残っていません。気付けば私の意識はブラック

アウトしてました。

・イチカ視点

「つと、ナイスキャッチ俺」

気絶し、ボロボロのまま地面に落ちていくオルコットを抱え、相手側のピットに連れていく。急いで担架が来てオルコットは運ばれて行った。俺自身もそれを確認してからピットに戻る。

「お疲れ様」

「おう、サンキュ」

ピットに戻ると簪が労ってくれた。俺としてはまあ楽なミッションだったよ。素人の小娘1人相手にしただけなんだから。

「んじゃ、俺は少し休ませてもら——「待ちなさい、イチカ・ワイルダー!!!」????なんだよ?」

高圧的な声と共に現れた1人の女。それに着いてくる黒服連中。彼女らを見て楯無

が驚きの声をあげる。

「貴女は??なんでここに?」

「知っているのか雷電!」

「???彼女はIS委員会の幹部のマリア・グレンダン委員よ。他の人たちは彼女の護衛。
彼女がなぜここに???」

おう、スルーすんなよ。簪に笑われてんじやねーか。

「で、そのマルタ・グレンラガンさんがなんの御用で?」

「マリア・グレンダンよ!!人の名前も覚えられないのかしら!?これだから男って???」

うわ面倒くさっ!よりにもよってガチガチの女尊男卑主義者かよ??。

「で、なんの用?」

「貴女の機体をこっちに渡してもらおうわ。ほら、さっさとよこしなさい」

「???こいつ頭湧いとんのとちやうか?びっくりしすぎて関西弁になっちまったじや
ねーか。」

「いやなんで?」

「貴女の機体、聞けばあの篠ノ之東が直接手掛けた機体らしいじゃない?そんな機体を
男に使わせるなんて耐えられるわけじゃない」

あー???要するに、だ。

あの男篠ノ之束製の I S もってるらしいぜ↓何!? そんな凄い機体を男なんかに使わせるなんて耐えられない! ↓じや取り上げちまえばいいんじゃないやね? ↓どうやって? ↓ I S 学園行つて直接取つてこようぜ! ↓それだ!

て感じらしい。アホかこいつら。

「グレンダン委員。それは委員会が許可したことなのか?」

流石に見咎めたのか織斑教諭が口を挟む。が、この女は、

「あらブリュンヒルデ。もちろんですわ。神聖な I S を男なんかが使っているだけでも腹立たしいのにそれが篠ノ之束製となれば尚更。今回の件は委員会の会議で満場一致で可決された事です。いくら貴女でも覆せませんわよ?」

「そうか?!!」

苦々しげな顔の織斑教諭。山田先生も不安そうにしている。てか満場一致で。終わってんな I S 委員会。

「さて、それじゃあさつさと機体を——」

「嫌に決まつてんだろ一昨日来やがれ。てか来んな」

「——なんですつて?」

たりめえだろうがクソアマが。

「コイツは俺の相棒だ。てめえら如きにや上等すぎる」

「ここは法律の対象外なんだよ。ハッキリいえば俺がお前をどうしようが咎めることは出来ない。さらに言えばここは外部からのあらゆる干渉を受け付けない方針なんぞな。お前らを始末して死体は魚の餌、俺は悠々自適な学園生活を遅れるって寸法だ」

グレンダンは口をパクパクを動かすばかりで何も言えないようだ。ちとやり過ぎか？

「???そこまでしておけワイルダー。グレンダン委員。そういう事ですからお引き取りを」

「へいへーい」

言われた通りグレンダンを解放する。

「くっ!?お、覚えてなさいよっ!」

わあお、テンプレ。狙ってんじやねーのかお前。

「聞き流しとくよ。あ、それとアンタ」

「何よっ!」

「いいケツしてるな。次はホテルで会おうぜ」

最後に煽っておくのも忘れない。

「~~~~~!!!死ねっ!!!」

その言葉を最後にグレンダンは黒服連中を連れてピットから出ていった。いやーそ

れにしても、

「面白いくらいにテンプレ通りの小物だったな」

「イチカ」

「ん? どうしたかんざし???

し?」

おい待て。なんで簪のハイライト消えてんだ。

「OHANASHI??しよ?」

「アツハイ」

あ、やばいやつだこれ。

「ちよつと待ちなさい簪ちゃん」

「??何?」

「お、おおたてな??し」

ウツソだろお前。なんでお前もハイライト消えてんだよ。

「私もそのOHANASHIに参加させてもらうわ???良いわよね?」

「アツハイ」

当然拒否権などあるはずも無く??。

2人に連行された俺はOHANASHI(物理)を受けるのだった???

「???
試合は？」

「私今回全く話してないんだが??」

「全くどうなってるんだアイツらは???」

「はわわ〜!ど、どうでしょう!？」

???
どうしょ (作者の本音)